

巻頭言

病院図書館の課題

高山赤十字病院 病院長
棚橋 忍

病院図書館の今後の課題を、当院の現状を踏まえながら、私見も含め述べてみたい。

病院図書館における今後の課題の一つは、医学情報のデジタル化への対応である。当院では、職員の要望に応じて平成18年1月に新規パソコン8台を図書室に導入した。それにより研修医・医師・看護師らの利用が増えている。図書室はデジタル情報の検索指導に加え、パソコンを使っての図表作成やプレゼン資料の作成支援も行うなど、その機能を拡大している。目下の課題は、電子雑誌・テキスト類の充実であるが、外国雑誌の中には6ヶ月、1年を過ぎると無料で見られるものもあることから、図書委員会は慎重に導入を検討しているようだ。

一方、デジタル化とともに病院図書館で注目されているもう一つ重要な課題は、患者への図書室公開、医学情報提供である。当院では以前より、ボランティアの協力を得て患者への図書サービスを行っている。病棟最上階にあるラウンジ(200㎡)は、患者図書室としても活用されて、一般図書・ビデオ・新聞に加えて健康雑誌・図書を提供している。今後、患者の医学情報ニーズが高まれば、司書による直接サービスも検討することとなるだろう。

このように、病院図書館は、時代や利用者ニーズに対応してその機能を変化させているが、それに伴う課題は病院図書館を担当する人

材の継続教育である。日赤病院の図書館の多くがワンパーソンライブラリーであることから、1994年に担当者が集まり、日赤図書館協議会を発足した。以後、研修会開催・会誌発行・ホームページ提供・文献の相互利用・会員図書室調査などの事業を行い、担当者の継続教育や図書室運営を支援してきた。その成果は大きい。

しかし、昨年度より、会の事務局を担当する当院司書によると、会の事業継続が危ぶまれるという。理由は会員の多くが、兼務、パート、派遣であることから、幹事・役員のなり手がなく、役員交代がままならない。また新しい病院図書館を担う人材の発掘が系統的になされていない点でも懸念されるという。

今後、職員の継続教育における支援など、図書室に求められる仕事は多義にわたることが予想される(現に起こっている)。そのため、会の組織が充実して図書室の発展に寄与するのが期待される。担当者諸君には専任、正規職員あるいは司書だからこそできるという、図書室サービスにおける「質の違い」や担当者の能力を一層アピールしてほしい。それが担当者配置の充実を促し、主体的・積極的に事業に参加できる会員を増やすことにつながる。

一方、病院運営の中でも、会員が会の事業に幹事として参加して、会の発展に寄与できる体制を考える必要がある。